



被ばく題材映画 日本初公開

監督来高 ビキニ元船員らと対談

黒潮町

【幡多】パリ在住の映像作家、渡辺謙一監督(69)のドキュメンタリー映画「我が友・原子力―放射能の世紀」が17日、幡多郡黒潮町の大方あかつき館で日本初公開された。県内

の元船員らが被ばくした米国のビキニ水爆実験も題材とした作品。来春の劇場公開を前に、本県を皮切りに国内6カ所です巡回上映される。

渡辺監督はこれまでも「ヒロシマの黒い太陽」「フクシマ後の世界」などのドキュメンタリー作品を製作。新作「我が友」はドイツ・フランス公共テレビArteが今夏に初放送した。

映画は57分で、五つの章で構成。1954年のビキニ事件を巡っては、被ばくした元船員や、長年調査に携わる太平洋核被災支援センターの山下正寿さん(75)と宿毛市川原が登壇し、被害や救済への思いを語っている。

このほか、時計の蛍光塗料に使用したラジウムによる健康被害や、核実験で被ばくした米兵、福島第一原発事故などを取り上げ、原子力や核、放射能について被ばく者の視点で語られる。

この日の上映は、「巡回上映を」高知で始め、福島で終わらなかった」という渡辺監督の意向を受けて、同センターが主催。約100人が鑑賞した。渡辺監督も来高し、上映後はビキニで被ばくした元船員や遺族らと壇上で対談した。

渡辺監督は「脱原発」反原発を訴えているだけではないと語り、

が、幅広い視聴者を対象に歴史を反すうするテーマを選んだ」と説明。「一番良かったと思うのは、高知の山下さんの努力が、ヨーロッパでも知られ始めたことだ」と述べた。

山下さんは作品について「内部被ばくがどういった影響をもたらすかなど、被災者の立場からリアルに伝えてい」と語った。

(今川彩香)